

早稲田商学第 451・452 合併号

2 0 1 8 年 3 月

消 息

大森郁夫先生をお送りするにあたって

大森郁夫先生は、2018年3月末をもって早稲田大学をご定年退職されます。先生のご退職にあたり、商学部教員を代表してご挨拶させていただきます。

大森先生は、1972年に早稲田大学第一商学部をご卒業後、同大学院商学研究科修士課程・博士後期課程に進学され、1976年に商学部助手に嘱任されました。その後、同専任講師、助教授を経て1987年に教授に昇進され、1997年には早稲田大学より博士（商学）の学位を取得されています。

学内では、商学部教務担当教務副主任、同教務主任、大学院商学研究科教務委員等をお務めの後、2004年9月から2年間、商学部長および商学学術院長をお務めになられました。学術院体制発足時の商学学術院は、独自の設立経緯を持つ複数の箇所から成立したため、その運営は難しいものがありました。そうした状況において、大森先生は、毅然と責任ある態度で困難な局面を乗り越え、初代学術院長としての職責を全うされました。私は当時、学術院長補佐・商学部教務担当教務主任として、先生のお仕事を近くで拝見しておりましたが、先生の的確な判断力と意志の強さに敬服した次第です。

先生は、6冊のご著書の他、数多くの論文、学会発表等を発表されています。横山先生が執筆された「消息」にも記されているとおり、先生が2012年に刊行された『文明社会の貨幣』は、経済学説史学界において高く評価されています。通常の学説史研究は、学説自体について、先行学説との関連性、各学説の独自性・体系性・現実妥当性などが吟味されます。同書においても、当然にそうしたオーソドックスな学説史研究的考察はなされていますが、同書の独特な点は、学説が生成した当時の社会思想あるいは文明観との関連性についても考察が加えられている点です。というよりも、そうした思想史の中に貨幣に関する経済学説を位置づけた点に、同書の独自性があります。「学説史と思想史の融合、とくに文明社会の思想史の中に初期の貨幣理論を位置づけたい」というのが、同書執筆意図であったと書かれています。

具体的には、17世紀末後半から18世紀の時期に、「貨幣」に関する経済学の諸学説がどのように形成されたかを論じておられます。現在でも、情報技術を活用した「仮想通貨」が出現しており、これをどのように理解するべきかについて定見はありません。この事実が示す通り、貨幣とは、非常に不可思議な存在といえます。経済活動の根幹をなしながら多義的で不確定な存在である貨幣について、経済学の原点に立ちかえって社会思想史のあるいは哲学的な思索を重ねた結晶が、先生のご著書だと思います。

門外漢の私が敢えて先生のご著書の内容にまで言及したのは、先生の研究者としての集大成が同書だからです。大森先生は、薫陶を受けた先生から言われた「研究者の真価は2冊目の著書によって決まる」という言葉を真摯に受け止め、実践されたのだと思います。私もこの言葉を、一研究者として胸に刻みたいと思います。

ここで個人的な話になりますが、大森先生との出会いは、今から30年以上前、私が学部4年生の時でした。英語経済学（現「専門英語講読」）とドイツ語経済学（現「専門ドイツ語講読」）で、先生のクラスを履修しましたが、後者は履修者数の少ない（確か6名位）授業でした。この科目履修がご縁となり、大学院進学後も、専門は異なりますが、研究の仕方や進路のことなどで、色々のご指導頂きました。そのようにご指導頂いてきた大森先生がご退職されるのは、寂しいかぎりです。

早稲田大学の規程に沿って、大森先生は、この3月をもって早稲田大学商学部の教壇を去られますが、研究者としての人生に定年はありません。先生のこれまでの早稲田大学とくに商学部に対するご貢献に深甚なる感謝の意を表するとともに、今後ともご健康に恵まれ、研究、読書、音楽鑑賞などを楽しまれることを祈念して、私の送別の辞とさせていただきます。

早稲田商学同攻会長

藤田 誠